

名古屋

石田学園報

第5号 平成7(1995).3.4

名古屋明德短期大学
星城高等学校
星城中学校
星城の幼稚園
星名英予備校
名英図書出版協会

学園創立55周年

——たゆまぬ前進を——

理事長・学園長 石田正城

昭和16年、名古屋石田学園の前身「明德学館」が創立されてから今年で55年目を迎えます。

創立者石田録徳先生は、自らの体験から得た「彼我一体」の感謝の精神を青少年にも体得させたいと、率先垂範親身の指導に徹してみえましたが、志半ばにして昭和50年12月23日に逝去されました。翌51年1月19日には厳粛な学園葬をとり

行い、私が理事長として責任者に就任して今年で20年目を迎えます。この間、偉大な教育者の高邁なる思想をいかに継承したらよいか迷いながらも、先ず建学の精神の高揚・具現化に精一杯努めてまいりました。十年一昔と申しますが、この20年間は一瞬にして過ぎてしまい、未だに逝去された感じを受けず今にも温顔が現れそうな気がします。

創立者没後、学園は星城高等学校女子部、仰星コースの増設、名古屋明德短期大学、星城中学校の新設と次々に拡大して、ほぼ倍の規模になってまいりました。これは偏に全職員の努力の賜であります。石田録徳先生は苦学力行して卒業した母校早稲田大学をこよなく愛しておられました。星城高等学校創設の際に定められた校章、スクールカラーの「エンジ色」等々、精神も姿も早稲田色を取り入れていました。それは昭和3年から9年まで商科、法学部と6年間学び、この間、多くの教授の方々から大きな薫陶を受けたからだだと思います。早稲田大学創設者大隈重信侯は、明治14年の政変で一夜にして謀反人とされましたが、その折に「停滞は死滅である」と自分の信念を貫き通された話是有名であります。この進取の精神が創立者在学当時の早稲田大学には充満しており、多大な感化を受けたのであろうと思われる。



本学園も、この精神、また創立者の意志を忘れることなく一歩一歩着実に前進を続けてまいりたいと願っています。折しも今年が創立55周年、ゴーゴー (Go, Go) の年です。厳しい私学運営の中、教職員皆様のご健闘をお願いいたします。

終りに「教育愛知1月号」に掲載された拙文を転載します。

「私学をとりまく状況と課題」

名古屋石田学園理事長 石田正城

各学校もいよいよ本格的な学生生徒の急減期に入り、昨今の経済的・社会的情勢の大きなうねりは、教育界にも甚大な影響を与え、極めて深刻な状況を呈してまいりました。学校側が生徒を選ぶという時代は公私立学校ともに過ぎ去り、今や生徒が学校を選ぶ時代となってきました。愛知の私学は、これに加えて、官尊民卑の意識がなお色濃く影を落とす地域の特殊性という厳しい環境の中で、各学校とも生き残りをかけた学校経営を兼知を集めて真剣に模索しております。魅力あり特色ある学校づくりをめぐり、まさに学校の命運をかけた闘いとなっております。その基本的な中身は、各学校が掲げる「建学の精神」の具現化をとおしての教育の勝負であります。私学が学校づくりを進めるための重要な課題の一つは、経営と教育の論理の整合性をいかに再構築していくかであります。教職員一人一人の学校経営への参加意識・学園への帰属意識の高揚が極めて重要なことになっているのであります。二つめは、教職員のための充実した研修体制の確立であります。現状は、私学の特殊な閉鎖性によるとはいえ、残念ながら公立に比してその組織性、系統性において格段の差があることを否めません。

各学校が、私学界で働く「市場原理」の「進化論」すなわち適者生存・自然淘汰に耐えて前進するためには、教師一人一人の教育のプロとしての力量に頼らざるを得ないのです。そのためにも、研修制度の充実こそは急務であると思います。私学が間の中に一筋の光を見出だすことが可能であるとすれば、まさに、これらの苦悩に満ちたハードルを乗り越えるための努力をする以外には道はなさそうな気がいたします。

企画室 より

短大に専攻科設置決定 学士号取得の道拓ける 学位授与機構より認定下りる

企画室では、かねてから名古屋明德短期大学に専攻科設置の計画を進めており、カリキュラム、施設・設備、担当教職員等諸条件を揃え、文部省へ届け出ていたが、去る12月21日に正式に受理した旨の通知があった。これに基づき英語科・国際文化科とも専攻科が、平成7年4月1日から修業年限2年で発足することになった。

続いて、2月1日日本学専攻科は学位授与機構より「大学の学部に対応する教育を行う課程」であると認定された。これにより本学専攻科卒業者は、本学で修得した単位に加えて他大学において修得した単位を合わせ一定の単位数に達すれば、四年制大学卒業生と同じ学位「学士」号を取得することができる道が拓かれた。

教学運営会議

平成6年度は、「学園各部門の自己点検・評価」というテーマで一年間、部門ごとの実践を報告しあってきた。各部門の性格、業務内容の相異からすべて同一歩調とはいかない面が多々あったが、最終的にはこの自己点検・評価をふまえて次年度の実践にどう取り組むかを報告しあった。ここに至る経過は以下の通りである。

◎第1回 6月1日 名古屋明德短期大学にて
全部門が共通の評価表で29項目140視点によってみずから評価し、その結果をそれぞれ次回に発表することとした。ただし部門独自の項目が必要ならばそれを設けるということになった。

独自項目の例

中学…道徳・建学の精神、志願者募集活動
短大…地域との交流 等4項目

○評価の方法

項目ごとにいくつかの視点が設けてあり、「優れている…+」・「普通…○」・「劣っている…-」の3段階で各視点ごとに評価する。
それを項目別にまとめさらに、全項目を総合して自己評価する。

◎第2回 9月21日 星城高等学校にて

6月1日の会議で課題とされた件について各部門から報告。部門ごとの評価の一例を挙げると

A部門



星城中学校にて

募集…-、職員構成…-、勤務状況…+、
校舎等の条件…-、講師…○、指導の実際…+、
(独自項目)業務プロセス…○

B部門

生徒指導…+ 図書館活動…-

C部門

勤務状況…+ 施設の規模…-

その他 略

以上のように各部門とも自己点検・評価をしその結果を発表した。

◎第3回 11月30日 星城中学校にて

前回の発表に基づき、そこでとり挙げられた問題点を解決するには、次年度はどう取り組むのか、その構え方、方策について部門ごとに発表した。部門によっては、前回の発表とは別に、現状に新たな角度から分析を加え、その結果に対する取り組み方を発表した場合もある。

D部門より

新しい分析の結果

個々の勉強…-

責任の明確化…+

生徒指導・クラブ…+ 等

その上に立って

一定の役職者の裁量権の明確化と強化

責任の明確化にともなう内規の作成

図書整備と読書指導の活発化 等

E部門

部門監査の充実

正常に行われていることをより定着して行く。

F部門

部門間の意思疎通を図るためには、事務担当者同士の打ち合わせを組織化していくことが肝要。

◎この自己点検・評価及び関連の作業によって、各部門が抱えている問題、なお未解決の事案、今後取り組み解決すべき課題等がかなり鮮明になった。解決はそれほど簡単ではないが、時間をかけて部門ごとに意思統一を図りつつ取り組むべきであろう。

<名古屋明德短期大学>

○公開講座

名古屋明德短期大学は、地域住民の生涯教育に資するため平成3年度から公開講座を開いている。

本年度は「地域と大学」という大きなテーマのもと、次の内容で講座が開かれた。唯一の学外講師として、地元の新日本製鐵株式会社から徳永良邦氏をお招きした。

○平成6年度公開講座の全日程

- 10月15日(土) 新田照夫助教授
「地域経済と大学：中部圏の地域経済と“まちづくり市民会議”運動」
- 10月29日(土) 徳永良邦氏
新日本製鐵(株)名古屋技術研究部長
「鉄鋼商品の進歩と社会への貢献」
- 11月9日(水) 加藤順一講師
「古代日本社会において「大学」とは何であったか」
- 11月19日(土) 松原隆治講師
「考古学と発掘—なぜ発掘調査をするのか—」
- 11月30日(水) 小堀用一朗教授
「三人の“八高生”(平野・本多・藤枝)」

○徳永良邦氏の講座

◇講座の様相

予め配布されたレジュメに沿って説明。

OHPを使用し表・グラフを提示。

ビデオを使用して製鉄のプロセスなどを説明。

参加者 約40名 内女性10名余

かなり高度でかつ堅い内容の話で、しかも2時間に及ぶ長時間の講座であったが、OHP、ビデオなどで講話の進め方に変化があり、内容が具体的で分かりやすく、聴講者は最後まで熱心に耳を傾けていた。テーマの関係からか男性が多かった。徳永氏自身も、折からの日本シリーズと愛知県体の開会式当日ということで参加者がほとんどないのではと心配していたが、これだけ来て頂ければ話し甲斐があると講座の冒頭に述べられ熱の入ったお話しになった。

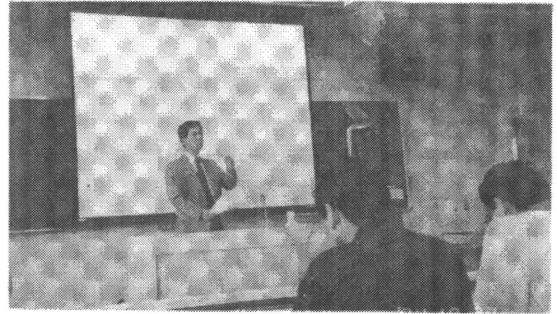
◇講座の内容より

1. 緒言

*新日鐵の社名の文字について。「鉄」は金を失うという字、「鐵」は金の王哉(かな)という文字となるのでわが社の社名は「鐵」の文字を用いている。

*鉄は産業の米、好況と不況の波を受けやすい商品で、日本は年間約1億トンを生産し現在世界一であるが、来年度からは中国にその座を譲ることになる見込みである。

*商品(材料)としての特徴(アルミニウム、銅、セラ



ミック、樹脂と比較すると)①強度が高い。②価格が安い。③溶接がしやすい。④リサイクルが容易。⑤磁気特性(コバルト、ニッケルを加えて特種な磁石を作ることが可能)。⑥いろいろな性質を付与できる(加工性、耐蝕性)。

*鉄の誕生は核融合による。地球の重量の1/3は鉄である。

*鉄鋼床の成り立ち。35億年前、海中のラン藻が炭酸ガスから酸素を発生させる。海水中に溶けていた鉄イオンがその酸素により酸化して海底に沈殿。これが20億年続き鉄鋼床となる。鉄は世界中に広く分布している豊富な資源である。

*鉄は、人体に必須な元素で摂り過ぎても害はない。

2. 製鉄プロセスの概略

ビデオの映像に基づき約22分にわたり説明があった。

3. 鉄鋼商品の進歩とその効用例

効用例としては、以下のケースが主たるものである。

- 1) 自動車用高強度鋼板
- 2) 自動車用表面処理(亜鉛メッキ)鋼板
- 3) 制振板(薄板、厚板)
- 4) ペンストック用100キロ鋼(水力発電所の水導管)
- 5) 明石大橋(余熱低減型80キロ鋼)

◇以上とても熱心に素人にも分かるようにお話し頂き、時の移るのも忘れるほど大変好評であった。

.....

秋 桜 祭

短大の大学祭である秋桜祭も今年で第五回を迎え10月8、9日は本祭、10日には後夜祭が行われた。今年は「インパクト〜はじけるPowerが瞬間(いま)〜」というテーマで、実行委員長は「各種の協力のなかで新しい明德を築くためにインパクトを強いものにしよう」という抱負を述べている。

国際文化科、英語科両学科長の先生からは、それぞれ「行事をやり、仕事をする過程で生涯付き合っていくに足る良き友が見つかるであろう。」「この機会に発想の転換を求めてはどうか。」というお言葉をプログラムの巻頭に頂いている。

星城高等学校

修学旅行——韓国への旅——

星城高等学校は2年生の夏から秋にかけて仰星コース、男子部、女子部の別に分けて修学旅行を実施しているが、昭和61年から行く先は、それまでの九州方面から変更して、韓国を対象にしてきた。そして韓国の歴史遺跡を訪ねるほか、姉妹校になっている現地の高等学校と交歓をしてきた。

このように海外を修学旅行の行く先に選んだのは、建学の精神のうち「世界観の確立」を具現化しようとするためである。外国の人と文化に触れて世界への認識を深め、世界観の確立の基礎を養うことは極めて意義のあることと考えるからである。今年度行われたコース・日程とその概要を記せば次のとおりである。

名古屋空港から大韓航空で釜山へ、あとはバスで行動。訪問地はまず慶州。ここで慶州温泉ホテルに1泊のち、2日目は新羅文化の建築様式の最高峰の芸術とされる仏国寺を見学。寺院そのものは言うに及ばず、紫霞門に掛かる白雲・青雲の二橋の示す韓国文化の芸術性の高さ、すなわち力学的にも優れた建築技術、そしてこの寺院の仏像彫刻の素晴らしさ、日本文化への影響・関連について学習。ついで慶州郊外の天馬塚。大きな土饅頭風の小山がいくつも並ぶ古墳群、町並みとともに良く保存されている。そもそも慶州の市街地が古墳群のなかにあるようなものである。

慶州の国立博物館で新羅文化の粹に触れる。日本でも有名な金冠などを見学。

2日目の夜は大田直轄市の儒城観光ホテルに宿泊したあと、3日目は群山中、姉妹学園の東山学園を訪問。男子部は同学園の群山東高校と交歓会、女子部は群山女子商業高校と交歓会。それぞれグリーティングカードの交換、サッカー、バレーボール等でスポーツの交流、また民族芸能・演奏の見学等で言葉の壁を乗り越えた友情の輪が盛り上がり、先方の歓迎は熱烈そのものであった。韓国学生の積極的な姿勢からは学ぶべきものが多かった。別れは大変名残惜しく出発時間を遅らせねばならないほどであった。

3日目の夜はソウル特別市瑞草区にあるソウル教育文化会館に宿泊。

最終日は、まずソウルから南へ1時間の郊外にある水源民族村へ。ここでは李朝時代の生活様式を見学、のどかな田園風景とは裏腹な儒教に基づく厳しい階級制度の存在したことを学習した。

水源民族村のあとはソウル市内へ。

ソウルはいうまでもなく韓国の首都、人口は1千万余、政治経済の中心でこの国第一の都市。雑踏、車の混み合う市街地から旺盛なこの民族の息吹を感じさせられた。

景福宮は李朝時代の五宮の一つ、壮麗な李朝文化の代表



的な建造物である。しかし、その正面直ぐ前には日本政府の旧朝鮮総督府の建物が現国立中央博物館として建っている。この建物を屈辱のシンボルとする国民感情を反映して今年中には取り壊され新しく建て替えられるという。韓国との関わり方を学習する材料である。

水源民族村、景福宮の見学を終えてソウルから空路名古屋へ帰着した。

この4日間、昼食・夕食の機会には「ビビンバップ」などの各種の韓国料理を味わい、食文化の違いも体験した。おいしいと感ずるもの、とても馴染めないもの、各人様々であった。また、ショッピングでは、民族調の品々を家族や友人のために選ぶ楽しい時間をもつことができた。とりわけ姉妹校の高校生との交流からは教えられることが多かった。

韓国は日本にとって最も近い外国。古くはこの国を通じて大陸文化から、またこの国自身の文化からも日本は多くを学んできた。20世紀に入って一時不幸な関係ができたが、それも一応終わってはや半世紀、両国は経済・文化とも今後ますます交流を深めねばならない関係にある。若い時にこの国の人々と接触し、その文化を体験して、今後の国際交流の糧にすることは意義深いことであろう。

わかしゃち国体で 星城高等学校在校生・OB活躍

平成6年の夏から秋にかけて愛知県各地において第49回国民体育大会（わかしゃち国体）が開催された。星城高等学校の在學生は、全国高校総体、続いて行われたこの国民体育大会でも、個人として、あるいは団体の一員として、愛知県の高校生のチームに加わって出場し、各種の競技において素晴らしい活躍をした。在校生の平松君が、レスリング少年男子グレコロマン81キロ級で優勝したなどである。また卒業生も、社会人として、あるいは大学生として各種目に出場し、同じく輝かしい活躍ぶりを示した。

愛知県が天皇杯・皇后杯とともに獲得した背景には、星城高等学校の在校生・OBの目覚ましい活躍もあったのである。

星城中学校

◎30キロメートル競歩会



勅使会館前で

「長い距離を歩き通すことにより、体力を高め苦しさに耐えうる気力を養う。」「公衆道徳を守ることの大切さを体験させ、自立的・協力的な態度を育成する。」という目的のもと、「集団行動訓練」の一環として、30キロ競歩会が平成6年11月22日に実施された。

学校を9時15分にスタートし、桶狭間古戦場前をはじめとする6つのチェックポイントを経て、14時45分ゴールの学校へ帰着した。途中名古屋市と豊明市の境界にある勅使池のほとりの勅使会館で昼食のち午後の競歩に入った。

1・2年生を縦割りにして5名ずつ1つの班として、全校18班編成で行った。

生徒は体操服、運動靴の服装で、学校指定のカバンに弁当、水筒、タオル、筆記具等最小限のものを入れ、隊列を組み歩き続けた。

評価は、班単位で「隊列の乱れ」「交通マナー」「点呼の報告」「時間の守り」その他忘れもの等の観点から「良い」0、「普通」-1、「悪い」-2、「最も悪い」-3という減点法で採点し、残りの持ち点の多い班を優秀班（第1位）とし、完成度を競うというものであった。途中、一部体調不良の生徒がいたが、班による完成度の差はあるものの、最後まで歩き通しえた者は整然とゴールへ帰着した。

教員によるコースの下見、その他綿密にして慎重な事前の計画・準備のもとに行われ、行事の目的に照らし総合して成功であった。

今後の課題としては、当日体調不良の生徒がでないために、前々から体調を整えるように指導すること、各班の班長以下全員が、集団の中の役割にともなう責任についてさらに明確な意識を持たせること等が考えられる。

星の城幼稚園だより

◎生活発表会

2月5日(日)豊明文化会館で平成6年度生活発表会が開催された。わが子の晴れ姿を是非見たいものと開館時刻よりはるかに早くから、父母や祖父母のかたがた、それに7年度入園予定のこどもたちが沢山来場した。

豊明市長ほか公職者のかたもお祝いにきて下さり大盛況であった。



3歳児組「ハッピーバースデイ」

発表内容は、元気のよい太鼓にはじまり、3歳児各組の歌と器楽遊び・お話し遊び、4歳児各組の歌と器楽・劇遊び、5歳児各組の劇・歌とアンサンブルを組ごとに2種類ずつ発表した。3歳児組のお話し遊び「ハッピーバースデイ」、4歳児組の劇遊び「金のがちょう」、5歳児組の歌とアンサンブル「ウィリアム・テル」などである。日頃の練習・保育の成果をみんなに見てもらおうと、こどもも職員も一生懸命であった。

わが子が「大きな声でせりふが言え、涙が出るほど嬉しかった。」と喜ぶ母親の姿もあって感激の一日であった。

◎作品展

11月19日(土)、20(日)

絵画や製作などをとおして4月からの成長ぶりを保護者のかたがたに見てもらうため、ひとりひとりの子供の思いを現わした作品を1人1点、その他に年長組はグループの絵と立体の動物がいる動物園を作り、年中組は等身大の自分自身のみの虫の製作、年少組はちぎり絵による果物を作成した。

作品を作る過程の試行錯誤のなかで、絵を描くことが好きになり、進んで描くようになって、丁寧に、最後まで頑張る気持ちも育ってきた。

当日は、母の会の委員のかたがたに中心になって貰い、木工教室、ビーズ手芸教室、プラバン教室を開催。親子で相談しつつ作成するなど触れ合いの機会にもなった。

◎クリスマス会

12月17日(土)

「サンタさんって本当にいるの?!」という子供の気持ちを大切に、クリスマス会を夢のあるものにしたと計画。「赤鼻のトナカイ」の演奏、キャンドル・サービス、園長扮するサンタクロースの出現とプレゼント等で子供はファンタジーの世界にひたることができた。

プロフィール

星城高校創設以来の学園功労者

前理事・評議員

浜島重一先生

本学園の理事・評議員浜島重一先生は、去る平成6年10月12日をもってご退任になった。まだまだお元気なのだが、お歳を考慮されて自ら退任された。浜島重一先生は、昭和61年から理事・評議員として本学園のために多大のご尽力を頂いてきたが、それ以前からも、お住まいの地元豊明町、のちに豊明市において各種の公職についてみえ、そのお立場から学園の高等学校設置、幼稚園設置等に当たり格別のご援助を頂いてきた。



先生は、お若い時から家業の農業に従事しつつ、推されて、豊明町・市における数々の公職に就任された。穏やかなお人柄と優れた能力、指導性が周囲から認められたからであろう。そして町長、続いて市長を長期間勤められたのち、遂に勲4等瑞宝章を受賞されるに至った。その際に作成された資料「受賞への歩み」によれば、歴任された公職は、とてもここに書き切れるものではないが、その一部を記せば下記のとおりである。

◎豊明町・市関係の主なご経歴

豊明町議会議員を昭和34年から3期12年、その間、経済常任委員会をはじめ各種常任委員会の委員長を歴任。

そして、町議会議長に昭和39年5月から1年、再び昭和42年5月から1年間就任。

ついで昭和46年4月から選ばれて豊明町長となり、町の市制施行に中心となってお尽力。昭和47年豊明町が市制を施してからは、初代市長として58年まで3期12年にわたり市勢進展のために多大のご尽力をされた。

59年11月には豊明市特別自治功労表彰を受け、61年文化の日には愛知県知事より地方自治に関する功労により表彰を受けられた。そして、昭和63年秋の叙勲で勲4等瑞宝章を授与された。地方自治の功労者としての赫々たる業績に

よるものである。

◎本学園との関わりについて

町会議員に初めて当選されたころ、町の有力者である教育長の浜島鎮正氏に紹介されて、学園創立者鎌徳先生にお会いすることがあった。そのとき鎌徳先生のお人柄、教育への熱情に打たれ、以後石田学園のために一肌脱ごうと格別のご助力を頂くようになった。その一例として、星城高校設立に当たり、お寺の土地やその辺りの開墾地を、地元のいろいろな意見のあるところを先生の粘り強いご熱意でまとめて頂き、学園は何とか校地として入手し、建築に着手することができたのである。35年前のことである。また、昭和38年の星城高校の開校を前にして、その前年度から建設工事を始めるに当たっても、地元の有力者として、何かと意見のあった地元の人々を説得する等、格別のご尽力を頂いたのである。

学園側の資料「名古屋石田学園50年誌」には、「学園は、昭和33年高等学校設立準備委員会を発足させ、校地の獲得に奔走、昭和34年10月豊明町の現在地に校地買収の契約を成立、その後登記の手続きを経て計25,000㎡を取得した。」とあるが、ここに至るには、鎌徳先生と親しかった元尾張高校の先生で、当時の町長古橋三男氏、町の元教育長浜島鎮正氏、そして陰になり日向になりのご援助があった浜島重一先生がたのお力に依る所が大きかったのである。

その後、星の城幼稚園・名古屋明德短期大学・星城中学校とつぎつぎに新設して発展する名古屋石田学園の歩みに応じて、適切なご意見を頂き今日に至ったのである。

理事・評議員を退かれても、ご退任のときのご挨拶にもあったように、いつまでも本学園を見守って頂きたく、そしてご社健であられることを心からお祈りするものである。

元星城高校非常勤講師 青木隆先生 勲4等瑞宝章を受賞

元星城高等学校非常勤講師（家庭科華道）青木隆先生は、平成6年秋の叙勲で、豊明市を中心とする地方自治への功労や華道の指導を通じて高校教育につくされた業績等により勲4等瑞宝章を受賞された。豊明市議会議長のほか数々の公職を歴任されたほか、この地方における池坊華道の重鎮として、星城高校などで華道の指導を続けられたのである。本学園関係の方の荣誉はまことに目出度いばかりで、心からお慶びする次第である。

地域紹介

山田町大野木あたり

鎌徳先生生誕の地

学園創立者石田鎌徳先生は、明治39年（1906）3月愛知県西春日井郡大野木村（現名古屋市区山田町大野木）において、石田家の4男として出生。大野木村は、現在はベッドタウン的な住宅地になっているが、鎌徳先生誕生の頃は純農村であった。先生の生家は半農半商を生業としていた。

鎌徳先生の名前の由来については、明治39年は干支でいうと丙午（ひのえうま）に当たり、当時は丙午生れの人は金か金偏の付いた漢字をその名前につけると災難除けになるとか、幸福を呼び込むとかいわれ、加えて明治39年は、前年大勝利に終わった日露戦争の凱旋の大観兵式が行われることになっていたため、金偏に凱旋の旋の字を添えて鎌の字を作り、それに道徳の徳の字を加えて「鎌徳」と命名したということである。

昭和30年山田村が名古屋市に合併される時編纂された「山田村誌」には、鎌徳先生は山田村出身の著名な教育者として掲載されている。

大野木村は、鎌徳先生の生誕後程なく、明治39年7月に、比良・小田井・中小田井・平田の各村と合併し、昔の庄の名をとった山田村として統合された。当時あった小田井・大野木・比良・平田の各小学校は廃校となり、その後曲折を経て明治41年には山田尋常小学校となった。その後、この地区の学校は山田尋常高等小学校、第二次世界大戦後は山田村立山田小学校、同山田中学校、ついで名古屋市合併後は、名古屋市立山田小学校、同山田中学校となった。昭和31年の山田小学校の児童数は1,043名。因みに、平成6年4月現在、この地域には、その後の人口増加に伴い、山田小学校と、それから分かれた平田・比良・大野木・浮野・比良西・中小田井の合わせて7つの小学校が、児童数も合計すると3,070余名に及んでいる。中学校も生徒数の増加に伴い、山田中学校から山田東中学校、平田中学校が分離独立している。そして、この地区にも高等学校の設置が望まれ、人口増加、児童生徒数の増加の波のなかで、昭和53年には名古屋市立山田高等学校が設置され今日に及んでいる。なお、中小田井地区には肢体不自由児施設の県立第一青い鳥学園が設置されて昭和30年から事業を開始し、翌年からは、その教育のために隣接地に県下養護学校の草分けの県立養護学校（現名古屋養護学校）が開校された。現在、山田地区全体の人口は、平成6年11月現在で51,227



鎌徳先生のお墓（陽岳寺）

人あり、昭和30年の名古屋市合併当時の7,146人に比べて約7倍以上になっていて名古屋市の西北の住宅地として発展しつつある。

山田地区の産業は、旧名古屋市内の特に西区から、主として新川沿いの地域に繊維・紙製品製造・製パン・機械器具製造等の大小の工場が移転してきて、農業地域から住宅と工場の混在地域に変わってきているが、大野木地区は比較的工業化されず、住宅地となっている。

12月23日は、鎌徳先生のご命日であるが、平成になってからは天皇誕生日と重なるので、前日の22日に学園としての法要・墓参を生家に近い菩提寺の陽岳寺で行っている。この山田地区には、15か寺余りの寺院があって、陽岳寺の曹洞宗をはじめ、臨済宗、真言宗、天台宗、浄土宗、浄土真宗の各宗派が多彩に入り混じっている。

江戸時代、庄内川が堤を越えて氾濫し、尾張藩と農民が一致して堤防（大野木堤）を構築したとき、堤下の陽岳寺に工事事務所が設けられたという。

神社は10社余りあるが、大野木にはその地名のもとになっていると考えられる大乃伎神社がある。

山田地区内で、平田方面へ新川を渡る橋の一つに平田橋というのがある。明治17年、自由民権運動盛んなころ、この橋の付近で警邏中の中村巡査と同伴者が、民権運動の過激派大島渚ら数名によって襲われ格闘の末殺されるという事件があった。今、橋の袂には殉職の記念碑が建っている。当時の自由民権運動、それに伴う反政府運動はこんなところにも波及していたものと思われる。名古屋市西区には、いくつかの歴史遺跡探訪のコースがあるが、その一つに、室町時代創建の陽岳寺、山門に特色のある福昌寺、大乃伎神社、比良地区の雨乞いの伝説のある蛇池・悲運の戦国の猛将佐々成政の生誕の地等を結ぶコースがある。

交通関係は、地下鉄鶴舞線の名鉄大山線乗り入れが実現し、東海交通事業城北線が中央線勝川と東海道線枇杷島を繋ぎ、加えて道路網も名古屋環状2号線の上に2階建て東名阪自動車道が延長し、東名高速道路と接続、山田地区は鉄道、道路の交錯する地区になっている。将来の発展が楽しみである。

平成6年度学園表彰

本年度学園表彰を受けたの方は次のとおりである。

(敬称略)

勤続20年 畠中 公夫 星城高等学校
〃 宮崎 正雄 〃
〃 大久保 隆 〃
10年 加古 泰資 〃
〃 信川 正史 〃
〃 富田喜美夫 〃
〃 春木 利久 星城中学校
(星城高等学校勤務と併せて)

特別表彰 上妻 駿逸 教育顧問

東海三県中学校英語弁論大会



本学園主催の第43回東海三県中学校英語弁論大会は、11月6日(日)星城高等学校石田記念館で85校85名の参加のもと行われた。

三位までの入賞者は次のとおりである。

優勝 学園長賞・愛知県知事賞

近藤夕記子 南山中

二位 学園長賞・名古屋市賞

橘 彩子 竜海中

三位 学園長賞・中日賞

川口佳那子 蟹江北中

参加者いずれも、特に優勝者は、とても中学生とは思えないほどすばらしいスピーチであった。優勝した南山中学の近藤さんのスピーチの内容は、リーダーの厳しさについて自分の体験に基づき述べたものである。

名英予備校

入校生を十分に確保できるよう教育活動の充実をはかっている。最近の活動は次のとおりでさまざまな工夫がみられる。

1. 主な出身高校から進路指導関係の先生を招き、激励会を開催。
2. 保護者会、三者懇談会の実施。
3. 冬期講習会の開催、直前対策講座の開催のほか、個別指導の強化。
4. 「合格手帳」の発行。
5. 教材の改訂。

「合格手帳」は新規の企画。受験生心得のエキス、すなわち前日の準備、当日の注意事項、各種のアクセントへの対応方法のほか、自分の受験に関するメモ欄、主要大学・短大の電話番号、地下鉄路線図などをコンパクトにまとめたもので、本校生に配布しているが好評である。

名英図書出版協会

構造不況による生徒減や業者テストの抑制という情勢のなかで、中学英語の図書教材を発行・販売するだけでなく、中学の現実の需要を見越して英語の聴取力コンクールを実施してきた。平成9年度から高校入試に聴取力テストが実施されることになっているため、従来は7月のみ実施していたものを、今年度は12月にも実施したところ、中学1年生を中心に多数の参加者があった。このように夏冬2回やることにより事業のより一層の伸長を図っている。

編集後記

従来は、年に1度の発行であったが、今年度は2回発行することができた。

本年度の重要な事項としては、明年度4月から短大の専攻科が発足することになり、あわせて学士号取得への道が拓かれたことであろう。それは短大のみならず学園そのものの飛躍に繋がることであるからである。そして幼稚園から中、高、短大、専攻科という小学校を除く一貫教育の場ができ、これをどう進めるかが今後の大きな課題となってきた。

また、各部門の自己点検・評価も学園の課題になってからすでに年を経てきた。そろそろその成果が見えるようにならなければならない時がきている。これは本来そのことがらの性格からして自浄活動ともいべきものの、学園の真の発展のためには、さまざまなハードルがあるというものの、各部門とも積極的な取り組みが必要である。今後継続して当たるべき大きな課題の一つであろう。